

AFTERNOON TEA

久留米ほとめきちゃんぽん

久留米大学生理学講座

中島 則行

この度、立命館大学の姫野友紀子さんからバトンを受け取りました、久留米大学生理学講座の中島則行です。姫野さんとは、京大生理学講座で野間昭典先生、大森治紀先生門下として同時期を過ごした間柄です。当時の京大には、現在の私のボスである鷹野誠先生がいらっしゃいました。それが縁で2015年に久留米に迎えていただきました。久留米に来てはや5年、九州の楽しみ方も分かってきました。今日は、九州・久留米のほとめき(おもてなし)話をアレコレ“ちゃんぽん”した紀行文をお届けします。

久留米といえば、東芝の創始者「からくり儀衛門」こと田中久重やCDの生みの親SONYの中島平太郎、ブリヂストンの石橋正二郎など発明家の街です。それには刺激的な歴史と豊かな自然が関係しているようです。

久留米の正月は、大善寺玉垂宮の火祭り「鬼夜」から始まります。かつて久留米が港町だった仁徳56年(368年)、頻出する海賊をついに火あぶりて退治した故事にちなみ、10mを超える大松明6柱を引き廻すという迫力満点の追儺の儀式です。

日々を過ごす実験室の北窓からは、四季折々の顔を持つ筑後平野と筑後川が一望できます。春は菜の花、秋はコスモス、河川敷の色彩や、冬の脊振山の雪化粧。真夏には、江戸時代から続く水天宮全国総本社の奉納祭事、筑後川花火が夜空を埋め尽くします。

筑後川は筑紫次郎とも呼ばれる暴れ川です。九州各地で大被害になった2020年の豪雨で筑後川も決壊するかとハラハラしました。久留米では大氾濫しなかったものの、自然の脅威には圧倒されました。

妻の明子は、福井大生理学の松岡達先生から鍛

錬を受けたIT技術を駆使しつつ、神経活動の謎の解明を目指して私と一緒に研究をしています。松岡先生と鷹野先生が同門です。名大の久場博司先生(大森研の私の先輩)の父君が、かつて頼先生時代の久留米大生理学講座の同門でして、時代を超えて複雑に織りなす生理学者の縁を実感します。

妻が研修医時代に見つけた東京入谷名物「変化朝顔」を、鷹野先生はじめ教室の皆で育成しています。大輪咲きの「団十郎朝顔」は大人気です。珍しい株は挿し木でクローンにできないか試しつつ、新種作成を模索しています。

大学の東側には、高良山から始まる耳納(みのう)連山が屏風のごとく広がります。麓の田主丸町はぶどうの逸品巨峰の発祥地です。その先、道の駅「うきは」には季節の果物がずらりと並び、あれこれ選び放題です。ここで旬の味覚を楽しんだ後は、少し遠くへ足をのばしてみましょう。

九州には古代の歴史遺跡が多くあり、サンカク、蕨手紋様、双脚輪状紋など不思議な幾何学模様を描かれた装飾古墳が有名です。古代人の考えを発掘しに行くかのように、王塚古墳、チブサン古墳、竹原古墳など各地を訪問しました。お茶の産地・八女の岩戸山古墳は「磐井の乱」で知られる筑紫君の墓に比定されています。風土記に記載された「石人像」が出土し、実物が隣接の資料館に展示してあるので古代を肌で感じることができます。小高い丘はすべて古墳かもしれない、と気分はインディアナ・ジョーンズです。

隣の熊本には世界最大級のカルデラを誇る阿蘇山があります。大噴火は数万年ごとに起きており、9万年前の超巨大噴火では、火山灰が北海道にも降り積もるなどグローバルスケールの驚異を体感



できるところです。ちなみに阿蘇のジャージー牛乳は、空前絶後の旨さです。

阿蘇くじゅう国立公園の水源に恵まれた久留米は酒どころでもあります。当然、酒に合う海の幸も豊富です。佐賀有明海の料理はとくに奇抜なものがあり、目でも舌でも楽しめます。これは食用ではありませんが、干潟で捕まえたムツゴロウとトビハゼの繁殖に挑戦しています。えさや水の循環など、改良を重ねながら長期飼育に成功しました。水色の模様とハート型の瞳をじっと見ていると癒されます。

夏の夜には近くの山へ虫取りに行きます。実験が終わって21時頃がベストタイム。2年前に捕まえてきたカブトムシ1匹が卵を産んで、いまは3世代目48匹の幼虫がコクワガタと一緒に冬越し中です。また、南方の外来種のクロマダラソテツ

ジミを街中で発見しました。久留米昆虫研究会に報告する予定です。植木の産地・久留米ならではの活発な物流が原因と考えています。

他にも久留米発祥とんこつラーメン、ツツジ、バラ、椿、河童の正体、天神伝説と話は尽きませんが、この先は、いずれこの地を訪れて楽しんでもらいたいと思います。古代から続く歴史はまだまだ続きそうですから。

新型コロナウイルス感染症による動乱で現地開催の学会が無くなりましたが、我々は元気に過ごしております。今年も気分転換に自然を観察しながら研究に勤しんで、また会場でみなさんとディスカッションをするのを楽しみにしています。



ご縁と愛知での生活

愛知医科大学医学部生理学講座

池上 啓介

早稲田大学先進理工学部電気・情報生命工学科の田原優先生からバトンを引き継ぎました愛知医科大学医学部生理学講座の池上啓介と申します。田原先生とは体内時計の分野で学生のころから学会等で度々一緒になり、同学年ということもあり仲良くさせてもらっています。ここでは私の経歴と現所属大学のある周辺の様子について書き綴ってみようと思います。

私は学生の頃(名古屋大学農学部、吉村崇研)は様々な生物を用いて季節応答と体内時計といった動物生理学を研究してきました。マウス、ラットだけでなく豚、羊、ヤギ、ウズラ(鳥類)、サクラマス(魚類)なども扱い、動物から細胞まで様々な手法を習得でき、今では新たな手法の立ち上げの際に生かされているかと思えます。体内時計の研究者に“あるある”なのですが、当時は数日ほとんど寝ずに4時間ごとにサンプリングなどということはざらで、時には寝ないように目覚ましバイブレータを頭に縛り付けてサンプリングもしました。学部生のころ指導教官からRNAはサンプリング直後に抽出するように言われて当時はあまり必要性を感じなかったのですが、最近では1日の徹夜でも疲れてしまうこの体のせいでその場で抽出してしまいたくなる気持ちも分かるようになりました。(時系列のせいでサンプルが膨大なため)疲れた翌日に抽出なんてしたくありません…。そんなハードで楽しい学生生活でしたが、学会等でご縁があり、博士取得後すぐに近畿大学医学部解剖学(重吉康史教授)に助教として着任できました。普通はポスドクなどを経るのが通例とも言える昨今ですが、ご縁とは本当に大事なのだなとしみじみ感じました。異動してからは医学部ということもあり、マウスを中心とした哺乳類の体内

時計の研究に邁進しております。その後、教授が参加していた環境生理プレコングレスに参加するようになり、そこで知り合った現所属である愛知医科大学医学部生理学講座の増測悟教授とご縁ができ、今のポジションに声をかけていただいたので、増測教授はもちろんですが、ご縁を結んでいただいた日本生理学会には感謝しております。進路が決まっていない学生さんも色々なところに参加して様々な方とお話してみるとよいと思います。

現所属の愛知医科大学は名古屋市の隣の長久手市というところにあり、大学の病院等は建て替えたばかりなのできれいですが、研究棟は50年近く前のもので、黒川紀章氏がデザインした動線の利便性を無視した監獄のような斬新なデザインになっています(写真)。ドクターヘリも大学の売りなのですが、研究棟前にヘリポートがあり、音や危険性を除けば、毎日ヘリが見られる素晴らしい場所です。長久手市は、徳川家康と羽柴秀吉が戦った「小牧・長久手の戦い」の場所で古戦場もあります。その名残なのか「血の池公園」なる物騒な地名も至るところにあり、普通に住宅街になっていることにも驚きです。この「小牧・長久手の戦い」ですが、一般的には秀吉が唯一家康に敗れた戦として知られています。しかし、実際のところは秀吉の圧勝で、家康が全国の各勢力と同盟し秀吉包囲網を作り上げて戦いに挑んだところ、「小牧・長久手の戦い」という小さな戦いではかったものの、秀吉の外交策のせいでこれらの包囲網が瓦解し結局のところ家康は秀吉に臣従することになったということです。個人的には研究に邁進して関わりたくないのですが、この業界でも「外交」の大切さを痛感させられます。



斬新な研究棟内部

話は戻りますが、長久手市は2005年の愛知万博が開催された場所でもあり、リニアモーターカー(乗り心地は良いですが、少し割高…)が通っています。名古屋市郊外ということもあり、住みよさランキングではここ数年全国トップ10を維持し

ています。最近では若者が急増し、平均年齢は全国の自治体で最も低い「日本一若い街」でもありません。市内を見渡しても「高齢化社会はいずこに?!」と思うほど子供連れが多く、若者であふれています。ただ、大学周辺は市街地から離れているため周りは田畑・林です。夜中サンプリングして校内を歩いているとタヌキやイタチに出会うくらい、(学生にはかわいそうですが)周囲に何もなくて、逆にそれが勉強・研究にいい環境としては良いのかもしれませんが、静かなのは割と好きで、コロナ禍の影響で休日は家族で森の中の散歩が増えました。ただ、最近のコロナ第3波を鑑みると、昨今の頃、外出自粛で研究に進捗できるなどと甘いことを言っていた自分を戒めたいです。早くコロナが普通の風邪となりはて対面で議論しあえるようになってほしいものです。非常に適切なことを綴った内容となりましたが、読んでいただきありがとうございました。



ニューノーマルな研究生活

早稲田大学人間科学学術院

丸井 朱里

この度、桐蔭横浜大学大学院スポーツ科学研究科 桜井智野風先生よりバトンを受け取りました。早稲田大学人間科学学術院の丸井朱里と申します。日本生理学会には修士課程1年目の2012年から所属しており、2016年より生理学女性研究者の会にて事務局役員(インターネット担当)、2018年より若手の会にて運営委員を務めています。役職に就いてはいるものの、あまり多くの貢献はできておりませんが、専門領域以外の先生方と多く繋がるきっかけとなっており、毎年の生理学会大会への参加が研究生活における楽しみの一つになっております。

さて、生理学会大会への参加が楽しみ、と書いたものの、COVID-19の影響を受けて、2020年は

誌上開催、2021年はWeb開催となりました。学会では、研究内容のフィードバックを直接受けられるだけでなく、参加者と親睦を深める楽しさがあり(むしろ後者がメインかもしれませんが)、2年連続で直接的な交流ができないことは残念に思います。この1年間、会員のみなさまはどのように過ごされたでしょうか。早稲田大学では、前期は全ての授業がオンラインとなり、学内会議、ラボミーティング、様々な打ち合わせもほぼ全てオンラインでの実施となりました。後期に入ると、実習科目や一部の講義科目は対面での実施となりましたが、会議はオンラインがメインで、さらに大学院入試もオンライン実施となり、やはり例年とは異なる業務となりました。

私自身は、後期に講義科目を担当しておりました。初めて専門領域の講義を受け持ったため、スライド資料の準備だけでも苦労しました。さらにオンデマンド対応のため、録音をしてアップロードする作業もなかなか苦労しました。自宅での録音は、救急車など外からの音、夕方には防災無線から夕焼けチャイム、夜にはお風呂が沸いた際の音など、気を使いながらの作業となりました。同じく大学教員の夫も同様の授業準備をおこなっていたため、片方が録音している際は、別室で音を立てないように過ごす必要もありました。苦労もあった一方で、受講生のリアクションを見ると、「好きな時間に受講できるため、コロナが収まってもオンデマンドで受講したい」「何度も見直して一時停止もできるので、理解が深まりやすい」など、オンデマンドならではのメリットもあるようでした。教員側としては、学生がどの程度理解ができているのか感じ取りにくい、質問を挟みながら進行できないなど、デメリットを感じる場面も多かったため、学生とのギャップに気付かされました。

実験はというと、今年度はヒト実験をメインに計画していたため、感染対策を講じる必要があり、計画していたスケジュールでは実施できず、こちらも苦労しました。睡眠中に測定する実験でしたので、本来であれば、協力先の睡眠クリニック内で実施する予定が、感染予防のため被験者の出入りが認められなくなり、急遽各被験者の自宅で実施する計画に変更しました。被験者の募集も、例年であれば学内掲示板でポスター掲示による募集をメインとしておりましたが、構内に学生がほほえないため、学内ポータルサイトでの募集に切り替え、実験説明もオンラインで実施し、結果的に被験者には直接会わずしてデータを収集するという、初めてづくしの実験となりました。

この1年を振り返ってみると、新しい業務スタイルに適応しながら過ごしてきたように思います。今後は、新しいスタイルを取り込みつつ、より良い研究生生活を送っていきたいものです。それぞれのニューノーマルな研究生生活について、お酒を交わしながら語り合える場が早く来ることを願っております。